

高性能窓の重要性をイベントで啓蒙

YKK AP ☎011-272-6313

YKK AP(株)が住宅会社やリフォーム会社を招き、有識者の講演やディスカッションなどを通して、快適な住まいづくりに欠かせない“窓”について考えるイベント「APW フォーラム2019」、「リノベーションフォーラム」。札幌では、6月17日に札幌プリンスホテルでAPW フォーラムが、7月8日にサッポロファクトリーホールでリノベーションフォーラムが開かれた。

同社は、2014年にトリプルガラス専用の樹脂サッシ「APW430」を発売以来、窓の高性能化による住環境の改善と省エネの推進を掲げ、その普及を推し進めてきた。今年は窓製品に占める同シリーズの出荷割合が4割に達する見込み。さらにこれまで道内だけで生産していたAPW430を今秋から本州でも生産開始するなど、その普及に積極的な姿勢を取っている。



住環境の改善で健康長生き APWフォーラム2019



星氏 日下氏 志賀氏

札幌会場では、同社北海道支社の志賀一徳支社長があいさつに立ち、「北海道では住宅向けサッシが年間37万窓出荷されているが、そのほとんどが性能に優れた樹脂サッシだ。みなさんの強さも頂いて、さらにこの出荷数を少しでも増やしていきたい」と話した。その後、齊藤孝毅住宅本部ウインドウ商品部長が同社の窓製品について昨今の住宅行政の動きを紹介しながらプレゼンを行った。

続いて、星日二氏(首都大学東京名誉教授)が「健康な住宅を創りましょう」と題して講演。寝たきりの期間を短くし、「コロナと死ぬことをPPK(ピンピンコロリ)」と呼び、人が主体的で幸せな人生を送り、社会の介護負担を減らすための重要なキーワードとして説明。そのために必要な要素の一つとして暖かい家を挙げた。

たとえば、新築住宅に転居した人はアレルギー、高血圧、ぜんそく、肺炎、心疾患、脳血管疾患などの病気になる割合が減少した研究結果を紹介。住環境の改善が寿命を延ばす上で重要だとした。特に「部屋間の温度差が2度以内」「開放型燃焼機器の使用禁止」「24時間換気の使用」「湿度は高すぎず低すぎず」など、具体的な改善ポイントを示した。

休憩を挟んで日下洋介氏(株Eee works代表取締役)が「窓際の心地よさを考える」と題して講演。日下氏は、耐震等級3と冷暖房費保証などを軸に「豊かな暮らしの器を作る」ことを目指して関西で現在の設計事務所を創業。性能が大幅に向上した樹脂サッ

シを使うことを勧めた。窓の断熱性能が向上することで、吹抜けに大きな窓を作っても寒くなく快適で、家族同士が適度な距離感を保ちながら緩やかにつながる空間づくりが可能になるとした。また、大開口のテラス窓を使うことで内と外とのつながり方をコントロールすることが今後の住まいの豊かさのカギになるとした。

最後にYKK AP住宅本部の石川創氏が司会を務め、星氏と日下氏がトークセッションを行った。湿度のコントロールの質問に対して、星氏は「快適性に影響するのは温度よりもむしろ湿度」とした上で、「湿度のコントロールをする方法について共同研究をしており、近々成果を発表できるだろう」と答えた。また石川氏は、日下氏が講演で話した「部分部分のU値を気にする重要性」について詳しい説明を求めた。日下氏は「肌寒い」などの不快感は、局所的にU値の悪い箇所で起きやすい。設計者は、U値だけでなくU値の分布を把握することで、不快感を感じさせない設計上の手当をすることができる」とした。

社長
1.7.27
手塚

住宅市場は中古活性化で3倍に リノベーションフォーラム



島原氏 水嶋氏 手塚氏

札幌会場では、様々な立場からブームを支えてきた3氏が講演。トップバッターは昨今のリノベーションブームの仕掛け人でもある島原万丈氏(LIFULL HOME'S総研所長)で、リノベ市場の動向について様々なデータに基づいた分析結果を報告した。

それによると、2004年をピークに日本の人口は減少トレンドとなり、少子高齢化が進んでいる。新築戸建の購入層である25～44歳の人口減少幅はさらに大きく、住宅産業の縮小を危惧。欧米のような住み替えの文化を根付かせることで、中古住宅やリノベ市場が活性化し、住宅市場が3倍に成長する可能性を秘

めているという。

リノベーションの認知度は地方都市でも高まっている。住宅雑誌「スーモ」の調査によると、札幌市で「リノベーションという言葉・内容を知っていて関心がある」という人が49.7%と半数に達し、首都圏と大きく変わらないとした。

次に登壇したのは2011年に京町家の景観や町並みに配慮したリノベーションを提案する「京ぐらしネットワーク」を立ち上げた水嶋弘明氏(平成建材株)。

水嶋氏は既存不適格となる京都市内の古い町家をリノベして再生し、流通させる仕組みを地元工務店、設計事務所、不動産会社などに働きかけて構築。成功を納めた経緯を語った。例として、築100年を超える民家を耐震等級3相当、断熱性能をHEAT20・G2レベルまで性能向上リノベした「醍醐寺の家モデル」について紹介した。

続いて登壇したのは、J-耐震開口フレームの開発者で、YKK APの高性能樹脂窓を組み合わせた「フレームII」を共同開発した手塚純一氏(J建築システム株社長)。

安全な家づくりは、接合部、壁配置のバランス、基礎・地盤が重要。開口部を耐力壁化すると、ねじれの

抑制になると説明。コンビニエンスストアのような最大10.1mスパンの大空間を、開口部を耐力壁化して木造建築で実現した例などを挙げた。

最後に「性能向上リノベーションの未来」と題し、講演した3氏によるトークセッションが行われた。話題は省エネ基準の義務化延期にも及び、義務化でなくとも、トップランナー制度などを活用しながら、「基準を満たすことができる会社はビジネスチャンスと捉えてアピールしていくべきだ」と、性能向上に取り組んできた業界全体に対しエールを送った。



リノベ事例の展示を多くの人が見学していた